

## 7. アンケートによる3・4カ月児精神発達スクリーニングの試み

東邦大学小児科 諸岡啓一  
多田博史

### 〔目的〕

生後3～4カ月児において、アンケートにより精神発達の遅れをチェックして、精神発達遅滞を早期に発見すること。

### 〔方法〕

東京都内OおよびK保健所において、3～4カ月児健康診査（健診）の際、下記の間診（アンケート）を行った。

O保健所においては、健診会場でアンケートを渡し母親にチェックさせた。K保健所においては、保健婦による健診の間診の際、アンケートについても間診を行いチェックした。

次にアンケート（問診票）を示す。

- |                       |        |
|-----------------------|--------|
| 1. 目でもの(人)を追いますか      | はい・いいえ |
| 2. あやすと笑いますか          | はい・いいえ |
| 3. 声を出して笑いますか         | はい・いいえ |
| 4. あやすと静かになりますか       | はい・いいえ |
| 5. 物音に反応しますか          | はい・いいえ |
| 6. 声の方にふり向きますか        | はい・いいえ |
| 7. ガラガラをしばらくにぎっていますか  | はい・いいえ |
| 8. 頸はすわっていますか         | はい・いいえ |
| 9. 体が軟いですか            | はい・いいえ |
| 10. 飲みが悪い／体重の増えが悪いですか | はい・いいえ |
| 11. おとなしすぎると思いませんか    | はい・いいえ |
| 12. 機嫌が悪い／驚き易い方ですか    | はい・いいえ |
| 13. 眠りが不規則／夜泣きが多いですか  | はい・いいえ |
| 14. 新生児期代謝スクリーニングテスト  | 済・未    |

上記の項目中、No. 1～6の6項目のうち、少くとも1項目以上が「いいえ」であったもの（「異常疑児」とする）について、次のように第1次（健診当日）、第2次（1～2カ月後）の診察を行った。「いいえ」に全く該当しなかった児は「正常」とした。

異常疑児について、第1次の診察は小児科経

験5年以上のもの（O保健所）、または小児神経専門医（K保健所）が担当した。上記の異常項目をチェックして、明らかに正常なものは「正常」としたが、それ以外は「要追跡」として第2次診察（経過観察）へまわした。第2次診察の担当者は、O保健所においては主として小児神経専門医、ときに経験5年以上の小児科専門医があたり、K保健所においては小児神経専門医とした。

次に、診察時のチェック項目を示す。とくに、第2次診察の場合はこの他に神経学的診察も行った。

診 察	第1次	第2次
	(健診時)	(経過観察)
	( 月 日)	( 月 日)
1. 顔貌、周囲への関心	良・否	良・否
2. ライトの注視、追視	良・否	良・否
3. 音(ガラガラ)に対する反応	良・否	良・否
4. 頸すわり(ほとんどぐらつかない)	良・否	良・否
5. 引き起こし反応 頭部保持	良・否	良・否
	肘屈曲(傾向)	良・否
6. その他(筋緊張(体が軟い)、頭頸、大泉門など)異常があれば		

### 〔結果〕

#### 1. 対象数、異常疑児数

O保健所においては、第1次診察は昭和59年11月12日から昭和60年12月23日まで毎月2回、合計28回行われた。第2次診察は14回行われた。

K保健所においては、第1次診察は昭和60年4月1日から昭和60年12月16日まで毎月2回、合計17回行われた。第2次診察は9回行われた。

	健診通知数	来所数 (来所率)	アンケート 施行数	異常疑児
○保健所	2,402	2,306 (95.6%)	2,291	31 (1.4%) <sup>*</sup>
K保健所	916	872 (95.2%)	872	51 (5.8%) <sup>*</sup>

\* P < 0.005

健診通知数に対する来所数（来所率）は、両保健所で差がみられなかった。異常疑児の比率はK保健所で有意に多くみられた。

## 2. 項目別の異常人数と日齢

日齢は在胎週数により補正し、在胎40週からの日齢で検討した。平均日齢±標準偏差を示す。

	○保健所		K保健所	
	異常人数	平均日齢	異常人数	平均日齢
No.1	2	110	7	110 ± 15.8
2	0		0	
3	16	106 ± 13	16	110 ± 21.8
4	1		3	99
5	3	127 ± 4.9	5	100 ± 26.1
6	12	108 ± 16.6	33	108 ± 19.6

しかるに、○保健所における“アンケート正常児”90人（昭和60年5月）の平均日齢は、119 ± 3.4日であった。

項目ごとの異常人数は、両保健所ともNo.3（声を出して笑う）とNo.6（声の方にふり向く）の2項目の異常が多い。K保健所においてはとくにNo.6の異常数が多い。

両保健所ともに、アンケートで異常（「いいえ」）となった児の平均日齢は、“アンケート正常児”に比較して少い傾向にあった。

## 3. 1人あたりの異常項目数

	○保健所	K保健所
1項目のみの異常	25人 (No.6は9人)	41人 (No.6は23人 No.3は10人)
2項目の異常	0	9人 (No.3+6は4人 No.5+6は4人)
5項目の異常	0	1人 (No.1~5)
6項目の異常	1	0

以上のとおり、1項目のみの異常が多かった。その場合、No.6またはNo.3の異常が多くみられた。6項目全ての異常がみられたのは1人（重症心身障害児）であった。

## 4. 第1次診察での措置

	1次での措置		
	異常疑児	正常	要追跡
○保健所	31	5 (16%)	26 (84%)
K保健所	51	9 (18%)	42 (82%)

第1次診察（健診当日）で、診察医師による問診ないし診察で正常と判断されたものは両保健所ともほぼ同率で、16~18%であった。残りの82~84%の児について追跡した。

## 5. 追跡結果

主として第2次診察、一部第3次診察での判定結果を示す。

	正常	要追跡	精検	未来所、他
○保健所 (26人)	18	5	1	1 (病院既受診) 重心児 1 (拒否)
		↓	↓ 難聴	
		第3次	{	
			4 正常	
			1 てんかん発症	
K保健所 (42人)	18	9	1	8 (追跡中) 1 (未来所) 1 (他医受診) 1 (転出)
	+ 3 (訪問、 委託健診)	↓	↓ 難聴	
		第3次	{	
			5 正常	
			3 追跡中	
			1 未来所	

### a) ○保健所について

要追跡26人中、来所したのは24人であった。うち難聴疑い（1人）は耳鼻科精査により難聴と診断された。

第2次診察で要追跡となった5人中1人はてんかんが発症した。現在のところ（昭和61年1月）、病院（著者らの）を既に受診していた1人（重症心身障害児）を除いて、本アンケートにて精神遅滞が新たに指摘されたものはない。

### b) K保健所について

要追跡42人中、現在追跡中が11人いるが、明

らかな精神遅滞と診断されたものはいない。第2次診察に来所しなかったが、保健婦による訪問や委託健診（開業医）で正常と判断されたものは3人である。やはり難聴が1人見出されている。

〔考 察〕

1) 異常疑児はK保健所において有意に多くみられたが、その理由として、チェック方法（保健婦が問診を行う）や社会経済的状态（中小企業が多く住宅密集地域。O保健所は主として住宅地）の差によると考えられる。

2) 「声の方にふり向く」、「声を出して笑う」の項目についての異常が多くみられた。このア

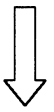
ンケートで異常の児は、正常の児に比較して、日齢が低い傾向を示した。したがって、異常（疑）児の中には、日齢が若いためにチェックされたものもいると考えられた。

3) 本アンケート法によって精神遅滞を3～4カ月で見出すのは困難なように思われる。その理由として、検索母数、月齢が低いために反応の分化（異常）が現れないこと、などが考えられる。

しかし、現在少くとも11人は追跡中であり、さらに1歳6カ月児健診の結果と併せて検討する予定である。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔目的〕

生後3~4ヵ月児において、アンケートにより精神発達の遅れをチェックして、精神発達遅滞を早期に発見すること。